



武田邦彦 (著)
「生物多様性のウソ」
小学館

2011年6月6日初版発行 254 pp. 777円

世の中の環境問題の一般理解に、一石を投げ続けている著者の新刊の一冊である。武田氏の本来の専門は工学のようであるが、同氏が、地球温暖化やエコロジーなど、多岐にわたる分野に対して、評論活動を行っていることを知っている学会員も少なくはあるまい。

さて、今回の著作は、我々会員が強い関心を抱いているであろう生物多様性に関するものである。まずは、著者は、「地球のキャパシティから見て、最も適当な種数は不明である。したがって、種数は単純に多ければよいと言うものではない」と説く。また、この著者によれば、生物がとても元気で良かった中生代と比較して、現代は、2000万種ほど種が多すぎる。よって、人類の文明活動によってもたらされている年間4万種の生物が絶滅する状態が、500年ばかり続いたほうが、生物界にとって良いかもしれないと言うことらしい。つまり、著者は、生物多様性を重視する現在の環境保全のあり方に異議ありと主張したいわけだが、そもそも、中生代が、生物がとても元気で良い時代と言う根拠は何なのか。著者は、その重要な点につき、一切説明していない（だいたい、生物が元気でどういう意味？）。

極めつけは、ブラックバスを中心とした外来種問題を扱った箇所である。著者は、ブラックバスは日本にやって来て、既に一世紀たっているから、「外来種と呼べるかどうか微妙」であり（経過時間が問題なのか？）、「フナが琵琶湖に来て一億年たっているわけではなく、湖に、ブラックバスとフナのどちらが泳いでいようが、大きな問題ではない」と述べる。ようするに、著者は、北米から日本へのバスの人為的な導入と、地史的要因による大陸から日本列島への在来魚の分布拡大を同列のものとして扱っているわけである。その一方で、著者は、自然が残っているとされる地方都市周辺の森林は戦後に植林したスギやヒノキであり、人間が作り出した環境にすぎず価値がないと解釈す

る。里山にしても、人間が自然を改変したものに過ぎないものであるとし、全国的な里山保全活動に対して批判的である。人間による自然への干渉を、文明活動と言う特殊な代物と位置づけるのか、壮大な地球史の中の些細なひとコマにすぎないとするのか、著者のスタンスは、いったいどちらなのか。このあたりの論理展開は支離滅裂であるといわざるを得ない。そもそも、著者は、キャベツやトウモロコシ、イネなど人間の管理下にある農作物まで外来種として扱っており、生物多様性の危機が論じられる際に使用される「外来種」と言う言葉の定義を全く理解していない。外来種擁護論者が頻繁に持ち出す「農作物だって外来種じゃないか」と言う屁理屈に対する批判は、本会会員の高桑正敏氏の概説文（2006年「科学」vol. 76, No. 9）に譲りたい。このほか、外来種については、ここで書くに堪えない記述が随所に見られる。

武田氏の著作の内容についての直接的な言及はこれぐらいにしておこう。生物学は生物学者の専有物ではない。他分野の研究者による問題提起はおおいに結構。だが、用語の定義を理解せず、最低限の既存文献にすら目を通していただけないのであれば、その提言は有害無益である。ある著名な生物学評論家は、昭和天皇の戦争責任を扱った本の中で「自分は一次文献に目を通してほめておかないと臆面もなく書きながら、原資料に徹底的にあたる軍事史の第一人者の論説を批判しているが、一次史料を読む気がないのであれば、史料批判が必要とされる歴史分野に首を突っ込むべきではあるまい。そんなことより、憂うべきは、本年3月の震災以降、原子力分野のシロウトたちを著者とする、原発やエネルギー問題の本が、世の中に多く出回っていることである。引用文献をろくに示さず、表層的な知見を書き連ねた、読みやすいだけの新書が氾濫する現在の風潮は、まさに精神医学者の香山リカ氏が警鐘を鳴らす「日本人の劣化」の象徴にほかならない。出版社の良識も問われて当然しかるべしであろう。「生物多様性のウソ」は、このような出版業界の現状を把握する意味においては、一読の価値ありである。

(福井大学教育地域科学部 保科英人)